

## 脳卒中全盛期（一九六〇年代）

一九六〇年代の日本は、脳卒中の全盛期でした。

当時は脳出血が多かったせいもあって、脳卒中になったら、倒れたその場で絶対安静と言うのが、その頃の治療方針でした。だから、運よく命をとりとめても、寝たきりになれる人が大部分でした。

私は、「幸せとは、自立して自由に生き、今自分のできることでまわりの人の役に立つ働きの出来る時に感じるものだ。」と考えていますので、たとえ、脳卒中になっても、なるべく早くリハビリを行って、日常生活の自立度を高めて、寝たきりにさせないことが必要だと考えましたから、脳卒中のリハビリを私の第一目標としました。

我が国でリハビリテーション医学会ができたのは一九六三年でして、私が開業した翌年でした。早速、リハビリ医学会へ入会して学会に出席するとともに、東京清瀬のリハビリ大学にも度々見学に行きました。

先ず、病院を建て増しして、訓練室には、オーバーヘッドフレーム、平行歩行棒、階段昇降機、マットなどを置き、浴室にはハーバードタンクと水中歩行訓練のできる温水プールを設け、担当職員の教育を行ってから、脳卒中のリハビリをはじめました。

それから数カ月後、突然、県医師会の役員と県の職員が山本病院へやってきて、「リハビリの保険請求が出ているが、架空請求ではないかと疑って査察に来ました。」と言われ、全くびっくりしました。

でも、その当時、豊橋では市民病院も国立病院も、リハビリは全くやってなかった時代でしたから、疑われるのも当然でした。

しかし、リハビリ設備もすべて整い、担当職員も訓練されており、患者さんへのリハビリがきちんと行われている現場を見られて、大変びっくりされ、「これなら、リハビリの保険請求をされても結構です。」と言って帰られました。

その頃、町では、「中気になっても山本病院にかかれば、杖をついて歩けるようになるだけな。」という噂がひろがり、患者数は一挙に増えました。